



洋館の部屋は、夕暮れの光がカーテンの隙間から差し込み、ソファや床に散らばった体液の跡をほのかに照らし出していた。空気には甘い母乳の香りと濃厚な精液の匂いが混ざり合い、濃密な雰囲気漂う。ラミィはかなたにまたがり、J カップの重みをかなたに預けつつ、先ほどのプレイを思い出す。幾度となく繰り返される快感の余韻の海の中、肩で息をしていた。かなたの 25cm のペニスは、先ほどの激しい射精を経てもなお半勃起状態を保ち、竿にはラミィの愛液と精液が絡みつき、ヌルヌルと濡れ光っている。鈴口からは透明な液がポタリと滴り、血管が浮き出たペニスはピンク色に充血していた。「ラミィ…こんなの…頭おかしくなるよ…」と、かなたは恥ずかしそうにラミィの胸の間で呟きながら、視線をラミィの綺麗な顔に固定する。彼女の心は、快感と好奇心が混ざり合い、さらなる欲望に突き動かされ始めていた。



ラミィは全裸のままソファに仰向けになり、水色の長い髪がに扇状に広がる。Jカップのバストがずっしりと横に広がり、105cmのボリュームが重力に逆らってブルンツ！と揺れる。「かなたん、ほらあ〜♡ラミィ、もっとエッチなとこ見せてあげるんだからあ〜！」と、ツツコミ気質の高い声で挑発しながら、彼女は自分の右乳を掴み、乳房をムニムニと揉みしだく。陥没乳首から母乳がピュツ！と飛び散り、ソファに新たな染みを作る。「見て見て〜！ラミィのおっぱい、こんなに出ちゃってるよ〜♡」と実況し、彼女はわざとミルクのにじむ陥没乳首を指で開き、中のうごめく粘膜をかなたに見せつける。





かなたは「う…っ、ラミィ、それ…エッチすぎるよ…！」と声を震わせ、目を離せない。それに合わせて、彼女のペニスがムクムクと膨張し始める。ラミィはくすくすと笑い、「かなたんちゃんと見ててね～！ ラミィのここ、もっとすごいんだからあ～♡」と、両脚を大きく広げ、女性器をかなたに晒す。彼女の女性器は愛液でぐしょ濡れになり、ピンク色の粘膜がヒクヒクと動いている。ラミィは指で膣口を広げ、精液をまとった子宮口の蠢く動きをわざと見せつける。「ほらあ～、かなたんの精液、ここで絞ってあげるう～！ 子宮口、めっちゃ動いてるよ～♡」と、彼女は実況しながら、指を膣内に滑らせ、クチュクチュと音を立てる。



ラミィはかなたのペニスから溢れた精液を指で掬い、自身のクリトリスに塗りつける。ヌルヌルの精液がクリトリスを滑り、彼女の指が小さな円を描くたびに、クリトリスがさらに膨張して赤く勃起する。「んっ♡かなたんの精液、めっちゃヌルヌル～！ラミィのここ、気持ちいいんだがぁ～♡」と、ラミィは喘ぎながら実況し、身体をビクンと震わせる。かなたは「ラミィ…そんなのだって…僕、ヤバいって…！」と、ペニスがビクビクと跳ね、鈴口から新たな先走り液が滲む。彼女の心は、ラミィのエログロな姿に引き込まれ、羞恥心を上回る興奮が湧き上がっていた。





ラミィはさらに指を深く挿入し、膣壁を締め付ける動きをかなたに見せつける。「ほら、かなたん！ ラミィのここ、めっちゃキツイんだからあ〜♡かなたんのおっきいペニス、ギュウギュウ締めちゃうよ〜！」と、彼女は膣を収縮させ、愛液が指に絡みついて糸を引く。突然、ラミィの身体がビクンと跳ね、「あっ♡かなたん♡いくっ…！ 潮、吹いちゃうよ〜？かなたん見ててえ〜♡」と叫ぶと、クリトリスを激しく擦り、透明な潮がピューツ！と勢いよく噴き出す。一部はかなたのペニスに狙いを定め、竿を濡らし、ツヤツヤと光らせる。もう一部はかなたの顔に飛び、彼女の頬を濡らす。「うわっ…！ ラミィ、なに…！ これ、すごい…！」と、かなたは驚きながらも、潮の温かさにペニスがさらに硬くなる。



ラミィは息を荒げ、「ふふっ、かなたん、顔にまで飛んじゃったんだがあ〜♡でも、まだラミィイけるよ〜！ 見ててね〜！」と、次はかなたのペニスを使ってクリトリスを刺激し、二度目の潮吹きを始める。ピューツ！と潮が弧を描き、かなたのペニスに飛び散る。「あゝ♡イってるうっ！ ラミィ、めっちゃイってるからあ〜♡」と、彼女は大声で実況し、膣がヒクヒクと痙攣する。子宮口はかなたの精液を求めるように蠢き、粘膜がさらに充血して赤みを増す。かなたは「ラミィ…こんなの…我慢できないよ…！」と、ペニスを握り、ビクビクと震える竿を抑える。彼女の心は、ラミィの淫らな姿に完全に飲み込まれ、欲望が抑えきれなくなっていた。





ラミィはかなたを抱き寄せ、かなたの女性器に自分の愛液を塗り込みながら、かなたのペニスをいとおしそうに撫でる。「かなたん、準備い〜い？♡ラミィの本気、見せてあげるからねえ〜♡」と叫ぶ。痙攣するかなたの膣からは新たな愛液が溢れ出し、ラミィの細い指がかなたの張りつめた裏筋を撫でると、カリが大きく張ったかなたのペニスの先端から、新鮮な先走り液が溢れ始める。ラミィのバストがバルルンツ！と揺れ、母乳がピュツ！と飛び散り部屋にミルクーな香りが広がる。「ちょ・・・っ！ラミィ、上手すぎ・・・なんでっ・・・そんなに上手いのっ・・・」かなたは圧倒的なその 105cm のバストに挟まれながら、ラミィの G スポット摩擦と亀頭の高速手コキのダブル攻撃に苦しそうに喘ぎ、絶頂しそうになって身体を震わせる。



かなたのペニスは限界まで膨張し、カリが張り出し、鈴口がヒクヒクと開閉する。「ラミィ…！ 僕、もう…我慢できない…！」と、彼女は声を震わせ、ペニスから滴る先走り液がソファを濡らす。ラミィは「ふふっ、かなたん、めっちゃ興奮してくれてるんだあ〜♡ラミィも、かなたんのおっきいの、もっと欲しくなっちゃったよ〜！」と、挑発的な笑みを浮かべ、身体を起こす。彼女の女性器は愛液と潮でぐしょ濡れになり、太ももに艶めかしい光沢を帯びていた。部屋は二人の体液と熱気で満たされ、次の段階へと突き進む準備が整っていた。かなたの心は、ラミィのエログロなパフォーマンスに火をつけられ、積極的な欲望が沸き上がっていた。





洋館の部屋は、夕暮れの光が薄れゆく中、二人の体温と体液の熱でむせ返るような空気に満ちていた。ソファは愛液、精液、母乳、潮でぐしょ濡れになり、床には滴った液が小さな水たまりを作っている。かなたの 25cm のペニスは、バキバキに勃起してそそり立ち、片側で 2kg はあるラミィの J カップをペニス1本で持ち上げる。竿は血管がゴツゴツと浮き上がり、ピンク色に充血したカリは張り詰め、鈴口からは透明な先走り液が糸を引いて滴るラミィのエログロなオナニーと性技を見せつけられたかなたの心は、羞恥心を吹き飛ばすほどの欲望に火がつき、積極性が一気に爆発していた。「ラミィ…もう我慢できないよ…！僕、もっとラミィのこと…めっちゃ…したい…！」と、彼女は声を震わせ、いつもより低いトーンで呟く。



ラミィは全裸でソファに膝をつき、Jカップのバストがずっしりと揺れ、105cmのボリュームが夕暮れの光に白く輝く。陥没乳首は完全に勃起し、長く硬い乳首から母乳がポタポタと滴り、ソファに染みを作る。「ふふっ、かなたん、めっちゃスイッチ入っちゃってるんだがぁ〜♡ラミィ、かなたんのそんなエッチい目、めっちゃ好きだよ〜！」と、高い声で実況しながら、彼女は両手でバストを寄せ、バルルンッ！と弾ませ挑発する。水色の長い髪が背中に流れ、彼女の女性器は愛液と潮でテカテカと濡れ光っている。